

みなと 物語

世界にひらかれた港づくり 築港工事に関わった人々

慶応4年(1868年)に開港した大阪港。当時は安治川の河口に港がありました。「大きな港をつくろう」という計画が度々持ち上がり多くの技術者が工事計画を練りましたが難工事や莫大な費用が高い壁となって、なかなか実現には至りませんでした。



犬島丸から運びあげられる大割石
〔大阪築港100年 上巻〕より

現在の大阪港の産みの親はオランダ人技師「ヨハネス・デ・レーケ」だといえるでしょう。明治政府に招かれて来日したデ・レーケは、築港計画のために奔走。何度かの挫折を乗り越えて、明治20年(1887年)に築港工事計画書を内務省に提出しました。明治26年(1893年)には最終計画をまとめ、明治30年(1897年)から築港工事が始まりました。



ヨハネス・デ・レーケ
〔大阪港のあゆみ〕より

デ・レーケの計画書の提出を受けて築港の実現のために尽力したのが当時内務省の土木局長であった西村捨三です。明治30年(1897年)には築港事務所初代所長に就任し、工事全般を指揮しました。その功績が称えられ、天保山公園内に銅像が建立されています。



西村捨三の像

大規模な築港事業には、ほかにも多くの技術者が心血を注ぎました。彼等の知恵と汗、そして実現を夢みる市民の声が結集されて誕生したのが大阪の海の玄関口「大阪港」なのです。



大型船でにぎわう築港大棧橋
(なにわの海の時空館提供)